博士論文「中世前期説話文学の研究」要旨

提出者　博士後期課程　鈴木和大

本博士論文（以下、本論文とする）は、日本の中世に成った説話集および説話を中心に取り上げ、考察するものである。

そもそも、説話集とは、個々の説話が集合したものであり、その集められた説話が編者の編纂目的あるいは配列などによって、ひとつの作品としてまとめ上げられていく。そうして成った説話集は、編纂方針によってそれぞれ異なる性格を有することとなる。

しかし、その一方で、編纂目的や配列が不明確なもの、あるいはそもそもそうした意識がされずに編まれた、いわば雑纂の説話集もある。本論文の第一部で取り上げる『宇治拾遺物語』（以下、『宇治拾遺』とする）もそのひとつである。

『宇治拾遺』は、本論文が対象とする日本の中世に成立した説話集である。この作品は、現在においても広く親しまれている著名な古典文学作品であるが、成立過程や編纂目的、編者などの基礎的問題についてはいまだ不明な点が多く、いずれの問題も、研究者によって論は異なり、それらは決着をみるに至っていない。

これは換言すれば、『宇治拾遺』の文学性、物語性が高い水準にあるということである。事実、個々の説話から、編者の姿や、典拠となった作品の面影などを推し量ることは難しい。

そこで本論文の第一部において、『宇治拾遺』に残るさまざまな問題点、不明な点を、少しでも明らかにすべく、成立論にかかわる問題（第二章、第三章）や、そこに収められた説話の考察（第四章、第五章）を述べる。およそ、説話集自体の、いわば作品全体にかかわる論と、各話の解釈に関する論とを展開し、『宇治拾遺』研究の歩みを少しでも前へ進めることを目指す。

さて、第一部を承け、第二部においては、『宇治拾遺』と深い関係にある、源顕兼編『古事談』を取り上げる。『古事談』は、本論文が対象とする中世の説話集として知られるが、『宇治拾遺』との間に、二二話の同文的同話が存しており、ゆえに、その関係は浅からぬものであったと想像される。

『宇治拾遺』はその文学性の高さから、研究者の手を阻んでいるようであることは先述したが、そうであるならば、その周辺にある文学作品の研究が必要になってくる。そうした意味でも、『古事談』を研究することは意義のあるものと推察する。

また、『古事談』は、典拠から忠実に説話を書承している。こうした特徴は、『宇治拾遺』との関係を追究するためだけに留まらず、『古事談』自体が、中世説話集の成立を考察するにあたって興味深い方法を採っていると考えてよい。

そして、第二部においては、『古事談』の出典について（第二章、第三章）、説話化の方法（第四章）、他書との関連（第五章）について論じ、また、同文的同話の比較対照表を付す（付章）。

さて、本論文が考察しようと目論む「説話」とは、「説話集」に収載された話に限らない。仏教書や歌論書などの説話集以外にも説話は散見する。そうした多様な説話の有り様を探るため、第三部では、第一部、第二部で扱った説話集から目を転じ、それ以外の文献にみられる説話、とくに中世に成立した楽書にみられる説話へ注目し、考察を加える。

具体的には、琵琶師伝集である『胡琴教録』、および、狛近真による日本最古の総合的楽書『教訓抄』を取り上げる。両書は、いずれも音楽に関する書、いわゆる楽書で、日本音楽史上、看過することはできない資料である。しかし、両書が有する資料的価値は、それだけに留まらず、文学と関わり合う側面も有している。すなわち、両書が持つ資料的価値は、本論文が対象とする説話文学、引いては、文学研究の立場からみても失われることはない。

また、第一部、第二部では、『宇治拾遺』、『古事談』という、関連しあい、かつ対照的な説話「集」を取り上げるが、繰り返せば、本論文が研究の対象とするのは、説話「集」だけではない。そこには、中世の「説話」も含まれている。

そうであるならば、やはり説話「集」だけを考察するのでは不充分だといえる。もちろん、第一部、第二部においても、個々の説話に関する考察を論じていくが、それだけではなく、説話集以外の文献にみえる説話も考察の対象とすることで、より広く中世説話について論じることが可能となる。だからこそ、第三部において、説話「集」から視点を引き、広く中世の「説話」について考察するために、その時代に成った楽書中の説話を取り上げるのである。

以上、本論文は、三部にわたって、中世説話に関する考察を論じていく。無論、数多とある中世説話のうち、検討の俎上に挙げられるものはごく少数に限られている。

しかしそれでも、各説話集が抱える問題を、あるいは、あまり検討されてこなかった種々の説話の実態、解釈を、本論文において、少しでも明らかにしていく。